

# 日本橋首都高 地下化工事は、 震災復興橋梁の 常盤橋保存が 前提条件

一般社団法人  
日本イコモス国内委員会  
主査  
伊東 孝



撮影：上岡弘和  
Takashi Itoh

マスコミ報道によると、二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック後に、日本橋上の首都高道路の地下化工事が開始されるといわれる。高速道路がなくなれば、頭上に青空が広がり、川面に林立していた橋脚がなくなると、川筋に沿った街並みや河川景観を望むことができる。大変楽しみだ。

しかし現在国土交通省で公開されているホームページを見ると、大きな問題のあることがわかる。江戸橋下流辺りから地下化された高速度道路は、日本銀行の前にある常盤橋公園の下あたりで、首都高八重洲線と合流するため、一石橋や震災復興橋梁の常盤橋を撤去して工事をを行い、完成後は橋脚のないワンプランの桁橋を架けようとしている(ホームページでは「架替」としか書かれていない)。

日本橋はもちろん重要な橋だが、震災復興橋梁の常盤橋も日本の近代橋梁の出発点を知る上では大変貴重な橋のひとつである。またこの界限には、同じく震災復興橋

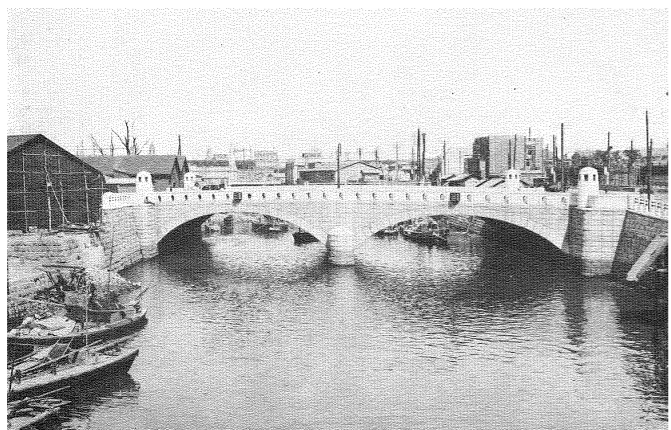
梁の西河岸橋(但し橋脚は明治のもの)がかかり、常盤橋公園の入口には明治十(一八七七)年に架設された石造アーチ橋の常盤橋もある。上流には大正八(一九一九)年に架設された鉄道橋のコンクリート・アーチ橋、日本橋の下流には震災復興橋梁の江戸橋がある。すなわちこの界限は、日本の近代橋梁を代表する名橋を相互比較しながら見ることのできる、都内でも稀な河川空間なのだ。

また江戸・大正時代の石積み護岸や、川沿いの野村ビルや日証館、三菱倉庫など昭和戦前期の河川沿いの建物などともあいまって、非常に魅力的な河川空間や景観を構成している。

「高速道路を地下化して日本橋に青空を取り戻そう」と耳ざわりの良い面だけが強調されているが、歴史的に重要なものを壊すことは大きな問題だ。震災復興橋梁の常盤橋を保存しながら工事をを行うことは、現代の土木技術をもってすれば十分可能だ。目先の工事費を安

くすることだけを考えて、歴史を破壊し、魅力をも損なうことは都市資源の大きな損失である。また土木の歴史と魅力を、また先輩が心血を注いで構築した作品を、土木屋自身が破壊することもなげかわしいことだ。最近の調査では、震

竣工当時の常盤橋(大正15年11月竣工)。高速道路がなくなると、景観はこのようにスッキリするが、周囲は高層ビルに囲まれている。垂直線と水平線とが強調される現代都市景観の中で、優美なアーチ曲線の存在は、都市景観に際立つアクセントを提供する。  
(写真:「帝都復興事業誌 土木編 上巻」より)



災復興橋梁の常盤橋は、復興局橋梁課長の成瀬勝武が、上部工と下部工はもちろんのこと、高欄廻りをも担当し、特に高欄金物は自ら手掛けたことが判明した。このことは、今まで震災復興橋梁は、土木屋(構造)と建築家(意匠)との共同作品と言われていた従来の説に疑問を呈することにもなった。

土木学会で土木史研究発表会が開始されてから、また本誌の前身である『建設業界』で近代土木遺産が表紙を飾るようになってから、四〇年近くになる。土木屋自身が、土木の歴史や作品をいまだに理解せず、無知なのは悲しいことだし、わたしども土木史に関心をもつ者の努力が足りなかったことを、今回の計画であらためて痛感した。

しかし幸いなことに、時間的な余裕はある。今回の計画は、インフラを中心とした都心部再開発のモデル事業である。土木関係者の知力を結集して、最善・最高の高速度道路の地下化工事を実現し、より魅力的な日本橋川の河川景観を実現す

るとともに、将来に誇れる都心部インフラ再開発のモデル事業にしてほしい。

## AI利用は、 自己領域を拡大し、 より人間的な判断を 可能にする

あたらしい技術として、ディープラーニングするAI(人工知能)技術が登場した。建設業界でもすでにこの技術に取り組み、実用に使っている部分もあると思うが、過度にAI技術に頼ると、次のような危惧を抱く。たとえば現代でも図面はコンサルタント任せの人がいるように、一日中、椅子に座ってコンピューターとにらめっこし、判断はAI任せで自己判断ができず、現場で判断できる技術者がいなくなるのではないか、ということだ。

しかし所詮、AI技術は道具である。これをどのように使いこなすかが肝心である。AI技術は、画像認識や音声認識といったパターン認

識が得意である反面、なぜそのような結果がでたのかを説明できないという(松原仁「AI社会を展望する③」日本経済新聞二〇一九年九月五日)。言い換えれば、五感のうち、触覚・嗅覚・味覚部分が不得手であり、第六感(直感)は働かない。また判断にいたった理由やストーリーを説明できないことだ。ストーリーのあることがより人の心を動かし、またある場合には、五感を統合し、第六感をも駆使して、ものごとを判断することを考えると、AIを利用するより人間的な判断が可能となる時代に突入してきたといえる。AIを利用して、自己領域を拡大できるし、感性に磨きをかけることができる。このような時代に、建設業はどのような方向に向かって、どのようなものをつくりあげていくのか、そしてどのようなストーリーをもつてするのか、難しい課題かも知れないが、夢があつてチャレンジに値する楽しい課題でもある。AI関係の技術の進歩は早い。とりあえずは、五年後や一〇年後が楽しみである。